

## 第四章 災害と土木

### 第一節 災 害

東南アジアモンスーン地域に属するわが国は北海道を除き、殆んど全国にわたって、毎年夏秋の交、二百十

日・二百二十日の暴風雨、延いて洪水が襲い、人々は天災として半ば諦めているが、繰返されるその被害は積算すると非常に巨額に達している。特に吉野川改修工事が未完成だった昔は、洪水の被害は甚大であった。故老の伝える「寅年の大水」は「北山から南山まで一面の泥流で一つの屋根も見えなかった」と伝えており、田畑の荒廢はもとより、人畜の死傷・家屋の流失など物凄い損害を与えた。またそれ程でなくとも、電信電話・鉄道など通信交通の停止混乱、電線の切断による夜の暗黒、時には道路・橋梁の流失、家屋の倒壊などもあって農作物に大きな被害を与え、農作の労苦を無駄にすることなどはたびたびのことであった。ここに交通不便の時代には凶作を生み、饑饉・餓死の危機に見舞われ、地震・旱害・蝗害・火災の上に年貢の過重は人々をして一揆の暴発にまで発展せしめたのである。

村の災害の主要なものを挙げると左の如くなるが、これら被災者に対する救助援護の中心になったものは昔の若連、近代の消防組・警防団の人々であった。

- 明治 三、 九、 九 吉野川大洪水
- “ 一七、 八、二六 (陰曆七月五日) 暴風雨、堤防決潰流失七十九戸、倒家二十戸
- “ 一八、 六 降雨打続き吉野川水害。赤痢大流行
- “ 二五、 九 大降雨洪水、吉野川堤防決潰
- “ 三一、 八 吉野川大洪水、堤防損亡多し
- “ 三二、 七、 九 大暴風雨洪水、「半の島」にて堤防決潰、本村濁流氾濫、農作物三割二分減収という。
- “ 四四、 八、一六 吉野川大洪水田圃被害多し
- 大正元、 九、二三 豪雨暴風、吉野川洪水濁水満々
- “ 七、 一、 一、 流行性感冒大流行し死者続出

- “ 一〇 旧正 一五 高川原大南郷田中八重蔵宅より出火、折からの南東風に煽られ十七棟十一戸焼失
- 全 焼 田中八重蔵、近藤音吉、太田藤吉、近藤棋蔵、近藤為三郎、近藤今太郎、西村梅太郎
- 納家半焼 近藤安太郎、近藤泰雄、近藤弥太郎、近藤惣太郎
- 出火原因は仏壇の線香火からであった。
- 他町村より災害見舞として衣料・食料品金円等多数の救援物資を受け、呉庁からは見舞金壹封が贈られた。この災害に鑑みるところあり当郷に腕用大型機械ポンプを買入れ常備とす。

- “ 一五 吉野川改修工事完成
- 昭和 三、 八、三〇 吉野川洪水あれども河川改修のため本村被害なし。
- “ 九、 九、二一 室戸台風(関西大風水害) 風速六〇m
- “ 一三 暴風雨あり、この年警防団結成
- “ 一八、一二、 八 朝、高川原南郷、先山猪佐美宅より出火、西の強風のため戸数四戸七棟焼失
- 被害家屋 先山猪佐美、久米繁三郎、大林筆一、清重武広
- 原因は火鉢の残り火からと伝えている。
- “ 二〇、 九、一七 大暴風雨、十月洪水
- “ 二一 赤痢大流行患者七十一名。南海大震災あり
- “ 二四、 六、一八—一九 豪 雨
- “ “ 六、二二—二三 デラ 台風
- “ 二五、 九、 三 シェーン 台風
- “ 二五、 九、一三—一四 キジャ 台風

昭和二六、二、一四	大	雪
〃 二六、七、一—二	ケイト	台風
〃 二六、一〇、一四—一五	ルース	台風
〃 二七、六、二三	ダイナ	台風

火災とともに吉野川の洪水はまた格別恐しかったという。

「霖雨数日、晴れざれば農民の憂苦常に河水の溢るるにありて皆郊外に出でて土を運び、堤塘の蟻穴を補う。遂に河水蕩々として山を噛み、陵に登るの勢あり、人々皆堤の上に集まり大に呼ばはりて洪水をふせぐ。水勢愈々盛にして人力の支うべきにあらず、忽ち堤塘を破りて漲り来る。勢は盆水を覆すが加し。河辺の家屋直ちに漂流す、老幼道に迷い人々呼号して奔走し、或は屋上に登り或は林樹をよち、屋漂い樹拔れば是も同じく亀鼈の腹に葬らる。幸にして全きも食尽き力窮すれば終に水中に落ちて死す。洪水数日にして引去れば万頃の田一毛の立つを見ることなし。父子皆失ひ只溺死の速やかなるを羨むのみ。是れ潦の苦しみなり」(白河楽翁、国本論。)

こんな時に消防団の活動はそれこそ決死の働きをしたのである。